

2021/09/22

『二つの秩序』 イザヤ書 40 章 1-31 節

「慰めよ。慰めよ。わたしの民を。」とあなたがたの神は仰せられる。「エルサレムに優しく語り掛けよ。これに呼びかけよ。その労苦は終わり、その咎は償われた。そのすべての罪に引き替え、二倍のものを主の手から受けたと。」(イザヤ 40:1-2)

「慰めよ。慰めよ。」これが、イザヤ 40 章のテーマです。

なぜ慰めが必要なのでしょう。それは、この世界に罪・咎があるからです。罪・咎による労苦を、聖書では「死の法則」と言っています。それが「この世の秩序」です。秩序とは、どうすることもできない仕組みのことです。そして、この世界にはもう一つの秩序があります。それは、「神の秩序」です。「神の秩序」とは、罪があがなわれて祝福される秩序であり、「いのちの法則」とも呼ばれます。神は、私たちが「神の秩序」の中で暮らせるように「慰めよ」と励ましておられるのです。

「荒野に呼ばれる者の声がする。「主の道を整えよ。荒地で、私たちの神のために、大路を平らにせよ。すべての谷は埋め立てられ、すべての山や丘は低くなる。盛り上がった地は平地に、険しい地は平野となる。このようにして、主の栄光が現されると、すべての者が共にこれを見る。主の口が語られたからだ。」(イザヤ 40:3-5)

「谷」とは、越えられないもの、すなわち、死を象徴しています。この世の秩序とは、どうしても越えられない死の壁があるということです。それに対して神の秩序は、「それを埋め立てる」という秩序です。神の秩序は、この世の秩序を壊すのです。

「山や丘」は人生における困難を表します。私たちの人生には、必ず困難があります。避けることのできない困難を、乗り越え、脱出できるように、神は英知を与えて助けてくださるのです。「盛り上がった地」は、日々の生活の中にある不安を象徴し、「険しい地」は罪を象徴しています。私たちは、罪を犯したくないと願っても、どうすることもできません。しかし、神の秩序は不安を取り除き、罪を取り除いて、平安を与えます。つまり、神の秩序とは私たちの罪を贖い赦す秩序のことです。

「呼ばわれ。」と言う者の声がする。私は、「何と呼ばわりましょう。」と答えた。「すべての人は草、その栄光は、みな野の花のようだ。主の息吹がその上に吹くと、草は枯れ、花はしぼむ。まことに、民は草だ。草は枯れ、花はしぼむ。だが、私たちの神のことは永遠に立つ。」(イザヤ 40:6-8)

この世の秩序と神の秩序の決定的な違いは、この世の秩序はすべてを滅ぼし、神の秩序は

永遠に立つということです。あなたがどんなに栄華を極めようが、名声を手にしようが、この世で得たものはすべて滅びます。しかし、神が提供している秩序の中で暮らすなら、あなたは永遠に滅びることはありません。

この世の秩序は「死の法則」、神の秩序は「いのちの法則」と呼ばれます。今、あなたはその両方に属しています。この世の秩序はあなたを滅びに導き、神の秩序はこの世の秩序に勝利し、あなたをいのちに導きます。このどちらに身をゆだねるか、それは、自分で選択することができるのです。

「シオンに良い知らせを伝える者よ。高い山に登れ。エルサレムに良い知らせを伝える者よ。力の限り声を上げよ。声を上げよ。恐れるな。ユダの町々に言え。「見よ。あなたがたの神を。」見よ。神である主は力をもって来られ、その御腕で統べ治める。見よ。その報いは主と共にあり、その報酬は主の前にある。主は羊飼いのように、その群れを飼い、御腕に子羊を引き寄せ、ふところに抱き、父を飲ませる羊を優しく導く。」（イザヤ 40:9-11）

■傲慢という過ち

人は、滅びに至るこの世の秩序を自分の力で変えようとしています。つまり、自分が神になろうとしているのです。これが、人の過ち、傲慢です。私たちは神ではありません。私たちは、神の秩序に身をゆだねるしかないのです。かつて、神のようになりたいと願った人々は、バベルの塔を築こうとしました。今の時代、私たちはどのような過ちを犯しているのでしょうか。

1. 律法主義

罪という険しい山を平らにするのは神です。しかし、人は、罪を自分で乗り越え、自分の力で罪を犯さないようになろうとしました。その代表が、パリサイ人です。結局、パリサイ人は、自分の力で罪を乗り越えることはできず、それどころか、逆にますます罪深いことになってしまいました。

このパリサイ人の中に、パウロがいました。彼は非常に熱心に律法に生きてきましたが、最終的にはできないことに気づき、自分はなんとみじめだろうかと告白しています。けれどパウロは、その絶望を素直に受け入れ、神と向き合い、自分の力ではなく、神の力を得ました。まわりを裁くことで自分を義としようとしたパリサイ人も大勢いましたが、それらは失敗して、絶望がもたらされました。

2. 科学万能主義（進歩主義）

進歩することで問題は解決し、世界は良くなって、この世の秩序は改善されると、人類は信じてきました。しかし、世界の歴史を見た時、どうでしょうか。人類は進歩によって、かつてないほど大きな戦争を起こし、今も世界中で戦争は続いています。また、私たちは進歩

を通して、少しでも寿命を延ばそう、つまり、滅びる秩序を何とかしようとしてきましたが、最終的に死を克服することなどできません。反対に、原爆という恐ろしい兵器を造り、むしろ自らを滅ぼす時間を短縮させたばかりか、いつ核戦争が起こるかという新たな脅威まで造りだしました。また、進歩という名のもとに、地球温暖化という問題が起こり、気候は変動し、これまでにない規模の災害に、人々は苦しめられています。果たして、人類は進歩し、良くなったと言えるのでしょうか。進歩することが間違っているのではなく、進歩によって秩序を変えようとしたことによって、別の問題が生じ、世界はますます絶望に追い込まれていると言えるでしょう。

3. 自由主義

自由主義という言葉にはいろいろな意味がありますが、「人には何でもできる自由がある」「自分で選択できる」という考えによって、神になろうとする過ちを人は犯しています。

この世のすべての出来事には原因があります。つまり、私たちは何らかの原因によって動かされているのですが、人は、その秩序を自分の力で壊して、自由を得ようとしてきました。しかし、「私たちには自由がある」と好きなことを選んだ結果得たものは、平安ではなくむなしさです。そのむなしさを回避するために、快楽が発達し、問題から目を背けるための楽しみを増やしました。自由に好きなことをした結果、人はますます孤独になり、絶望に追い込まれているという現実があります。

■自分を神としてはならない

この世の秩序は絶望をもたらします。そして、この世の秩序を人間の力で乗り越えることは、絶対にできません。にもかかわらず、人は自分の力で何とかしようとしてきました。聖書は、これを傲慢と呼びます。神のようになって秩序を作り、自分の力で何とかしようとする人間の愚かさに対して、神は次のように言われます。

「だれが、手のひらで水を量り、手の幅で天を推し量り、地のちりを柵に盛り、山をてんびんで量り、丘をはかりで量ったのか。だれが主の愛を推し量り、主の顧問として教えたのか。主はだれと相談して悟りを得られたのか。だれが公正の道筋を主に教えて、知識を授け、英知の道を知らせたのか。見よ。国々は、手おけの一しずく、はかりの上のごみのようにみなされる。見よ。主は島々を細かいちりのように取り上げる。レバノンも、たきぎにするには、足りない、その獣も、全焼のいけにえにするには、足りない。すべての国々も主の前では無いに等しく、主にとってはむなく形もないものとみなされる。」（イザヤ 40:12-17）

人は、「自分の力で神のようになれる」「私は何でも知っている」と傲慢になりました。その傲慢の象徴が、「神などいない」とする考え方です。今、人間は進化してきたという考えが主流となり、宇宙は永遠の昔からあって私たちはその進化の過程でできたと一般的に言わ

れています。しかし、聖書は、「お前たちは何を分かったつもりでいるのか」と語り掛けます。カントという哲学者は、この傲慢さを総合的に批判して「純正理性批判」という本を書き、人間の理性の限界を示して、私たちがいかに傲慢になっているかに言及しています。進化論は、現代のバベルの塔です。

私たちの理性では神を知ることはできません。それなのに、知ったかのようにふるまっています。私たちはこの世の秩序と神の秩序の両方に属しています。それなのに、この世の秩序を勝手に決め、神のようにふるまっています。

「あなたがたは、神をだれになぞらえ、神をどんな似姿に似せようとするのか。鋳物師は偶像を鋳て造り、金細工人はそれに金をかぶせ、銀の鎖を作る。貧しい者は、奉納物として、朽ちない木を選び、巧みな細工人を探して動かない偶像を据える。あなたがたは知らないのか。聞かないのか。初めから、告げられなかったのか。地の基がどうして置かれたかを悟らなかったのか。主は地をおおう天街の上に住まわれる。地の住民はイナゴのようだ。主は天を薄絹のように延べ、これを天幕のように広げて住まわれる。君主たちを無に帰し、地のさばきつかさをむなしのものにされる。彼らが、やっと植えられ、やっと蒔かれ、やっと地に根を張ろうとするとき、主はそれに風を吹きつけ、彼らは枯れる。暴風がそれを、わらのように散らす。「それなのに、わたしをだれになぞらえ、だれと比べようとするのか。」と聖なる方は仰せられる。目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。この方は、その万象を数えて呼び出し、一つ一つ、その名をもって、呼ばれる。この方は勢力に満ち、その力は強い。一つももれるものはない。」(イザヤ 40:18-26)

私たちが神のように傲慢になっている象徴が、さばくという行為です。人をさばくということは、自分を神とする顕れなのです。ここで悟る必要があるのは、この世の秩序は、人の力ではどうすることもできないということです。つまり、人は滅びるものであり、どうしても罪を犯すものであり、困難を避けることはできないという現実を知らなければなりません。私たちにとってこの現実には絶望でしかないのですが、この絶望を引き受けられたら、その先に神の秩序があり、そこに暮らすことができるようになるのです。

お腹がすかなければ食べたいと思わないように、悲しみがなければ幸せになりたいとは思いません。絶望するから光を求めるのです。絶望を回避する人は光を見ることができません。この世界は絶望です。そして、神の秩序はすべてをひっくり返すものです。だからイエス様は、心の貧しいものは幸いだと言われたのです。つまり、絶望と向き合えた時にわたしたちは、神の秩序の中に入れるようになるのです。これを悟り、絶望を自分の力でごまかして生きるのはやめなさいと神は語っておられるのです。

■神の秩序に住まう

「ヤコブよ。なぜ言うのか。イスラエルよ。なぜ言い張るのか。「私の道は主に隠れ、私の正しい訴えは、私の神に見過ごしにされている。」と。あなたは知らないのか。聞いていないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかけて上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。」(イザヤ 40:27-31)

この御言葉は、誰の心をも躍らせてくれます。それは、私たちが皆、神の秩序に属しているからです。ですから、神の励ましが心に響くのです。しかし、同時に、この世の秩序にも属しています。そのため、人の否定的な言葉を聞いて落ち込んでしまいます。

神の秩序は私たちに命を与えて生かし、この世の秩序は私たちを落ち込ませます。私たちはいつもその中間に立っています。そして、神の秩序があることを忘れて悩み苦しんでいるのです。その結果、「神がいるならなぜ助けてくれないのか。だったら、私は自分でやる。罪に勝ち、この世界を変えるのだ。」と傲慢にふるまい、自分ではどうすることもできないこの世の秩序をなんとかしようとして、自分の神のようにしているわけです。

しかし、その時、神は、「私を信頼せよ」と言われます。なぜなら、絶望の中で神の秩序が現れるからです。神の秩序は、私たちに次のようなものを与えます。

1. 疲れた者に力を与える

神の秩序は、弱いものを強くし、強いものを弱くして、平らにします。強いものは低くされ、弱い者は引き上げられるのです。この世の秩序とはまったく逆です。

2. 精力のないものに活気をつける

神は、この世界でいやしき者を輝かせます。イエス様は娼婦を輝かせました。イエス様だけが、彼女を素晴らしいものとして取り扱われました。

3. 主を待ち望む者は新しき力を得る

主を信頼する者は、罪が赦され、自分を苦しめていた過去が清算され、重荷が取り除かれます。私たちの心に重くのしかかっていた「あの時ああ言われた、こう言われた」という過去を切り取って白紙にし、私たちの自由を奪っていた重荷を取り除くのです。そして、永遠のいのちを与え、最終的に死の体を取り除かれます。この世界では重荷によって自由がありませんが、神は因果関係を壊し、私たちに真の自由を与えてくださるのです。それが新しい命を得るということです。だから私たちは、走ってもたゆまず、歩いても疲れません。そういう心の平安を手にすることができるのです。

誰もが二つの秩序を持って生きています。私たちは神の秩序を持っているので、神の話を聞くと、心が喜び、励まされるのです。神の秩序に住むためのカギは、絶望と向き合う勇氣です。「絶望」は、「不安」と言い換えることもできます。私たちは、不安と向き合う勇氣が必要なのです。

■不安と向き合うために

1. 自分の不安を誰かのせいにしない

私たちの不安の原因はこの世の秩序に属していることです。不安は誰のせいでもなく、この世の秩序のせいです。それを、人のせいにすると、絶望と向き合うことができず、神の秩序を手放すことになってしまいます。

2. 不安を自分の力で乗り越えようとしな

人が不安を解決する手っ取り早い方法は、人を裁くことです。人を裁くということは、相手の上に立つ行為だからです。人をさばけばさばくほど、自分は偉くなったことを確認して、不安と向き合えなくなります。

3. 自分の罪に気づく

最も大切な神の戒めは、神を愛し、人を愛することです。今あなたは人を愛していると言えるでしょうか。本気で人を愛そうと思ったら、人間の力ではとても不可能だと気づきます。そこで人は神に助けを求めます。ところが、どんなに祈り求めても、人を愛せない思いが自分の中から湧いてくるのです。このことに気づいて絶望し、それでもなお必死で神を求めるなら、神の光を見ることができません。

不安を人のせいにしたり、自分の力で乗り越えようとしたり、罪に気がつかない人の共通点は、不安から逃れるために、自分を変えるのではなく、相手を変えようとするところです。これが「自分を神とする」ということなのです。

なぜなら、変わる必要がないのは、神様だけだからです。昨日も今日もいつまでも変わることはない方は、神様だけです。

「自分は悪くない」と言って、自分を変えようとしな

こと、これが自分を神とする偶像礼拝です。この世の秩序と神の秩序、私たちは二つの秩序に属しています。神の秩序こそ、まことの力を与えてくれる秩序です。神の秩序に身をゆだね、平安を手にして生きましょう。